「臨床美術ほっかいどう 10 周年記念巡回作品展」に参加して

2023 年 9 月から 10 月にかけて北海道の 4 都市、北見市、旭川市、札幌市、函館市で「臨床美術ほっかいどう」の活動 10 周年を記念する作品展を企画していますというお知らせを受けて、わたしは即座に、ぜひその作品展の全部を見て、臨床美術士の仲間たちと喜びを共有したいと思いたち、すぐに日程調整をしてチケットを手配しました。

というのも、金子健二、木村伸、西田清子、そしてわたしの四人が臨床美術を立ち上げた時、合言葉があって、「まずは、10 年間やってみましょう. それで評価が定着すればよし、もしだめならまた別のことを考えましょう」 というものだったからです。
どんな活動でも何もない状態から小さな活動を始め、10 年間継続するのは並大抵の努力ではありません。私たち 4 人の活動は 10 年過ぎた時、敬愛する金子健二先生は病を得、この世を去りました。私たちはまさに片肺を失ったような気持ちで再出発したことを昨日のことのように思い出しています。ちなみに金子健二先生の命日は 11 月 20 日です。

臨床美術ほっかいどうの仲間たちは、10 年間の活動を継続し、それをやり遂げました。
快挙だと思いました。
北海道における都市と都市の距離の長さ、厳冬、大雪などの状況を考えると仲間同士の交流や合同の活動は関東地方のそれとは大変さが違います。
でも、彼らは継続して、今回大きな花を咲かせました。

わたしは残念ながら最後の函館での作品展にはインフルエンザにかかり参加できませんでしたが、他の 3 箇所には参加が叶いました。
いくつかの感想を書き出してみたいと思います。

＊北見市(2023 年 9 月 13 日～17 日：北見パラボ 3 階市民ギャラリー）

女満別空港には網走在住の臨床美術士の方と札幌から応援に駆けつけてくれた臨床美術士のふたりが待っていてくれました。
『歓迎、関根一夫先生』という、めちゃくちゃきらびやかな歓迎ボードを作って歓迎してくれました。
まずは、おいしいお寿司を食べながら予定を聞き、状況を尋ねました。
北見市にはもうひと方、臨床美術士がおられるとのこと。
いわば最低限度の人数での開催だなぁと感じました。でも、その情熱には圧倒されました。
網走市に住んでいる臨床美術士の方は期間中、毎日 1 時間以上自動車を運転して会場のセッティングから見学者への応対まで大忙し。北見市在住の臨床美術士の方も、会場での対

応に忙しくしていましたが、地元が北見市だという臨床美術士の方が札幌から応援に来て展示も対応もワークショップにも対応をしていました。
天気は雨。でも、作品展にはいろいろなところから見学に来ておられました。
『 臨床美術ってなんですか？ 』という質問が多かったように思いました。

それにしても、この北見市の作品展を網走市と北見市の臨床美術士ふたりと、札幌から会場の飾り付けのために駆けつけてくれた仲間とワークショップを手伝ってくれた仲間一人とでやり切ったいう努力と臨床美術への熱意には胸の熱くなる思いがしました。
最終日には網走から足を運んでくれている臨床美術士が初めてワークショップの体験をしその地域にとってはとても大きな告知と体験の時間になったようです。
思いがけず北見市で働いた宣教師と高知市の坂本龍馬の親戚の方との関係とか、ハッカの工場跡とかにも立ち寄らせていただき新しい発見がありました。
美味しい「塩やきそば」の味、忘れません。

＊旭川市（2023 年 9 月 30 日～10 月 1 日：旭川市民活動交流センター）

旭川への飛行機は空港でのトラブルがあり 1 時間ほど遅れご迷惑をおかけしました。
やはり歓迎のプラカードを持って迎えていただきました。作品展の前日に到着したので、美しい美瑛の景色や花を見せていただき、美しい自然を堪能させていただきました。感動しました。
夜、設営中の会場を訪問しました。レンガ作りの素敵な建物でした。
旭川市在住の臨床美術士の皆さんと札幌から応援に駆けつけてくださった数名の臨床美術士たちが、それこそ、腕まくりをして展示会場の設営に忙しく働いていました。
徹夜も辞さない心意気がそこにはありました。
地域を超えたチームワークの実践。心からの支援の姿がありました。
翌日、作品展か始まりわたしは旭川市で著名なお蕎麦屋さんの女将さんとの対談をさせていただきました。その地域で有名だった方の邸宅を買い取って丁寧にお店として使用し文化財として認証され、250 年は使おうという取り組みをしておられる方で、臨床美術に興味を持ち、そのお店で臨床美術のセッションのために会場を提供してくださっている理解者です。
対談では、なぜ臨床美術に興味を持たれたのか、建物の保存とそこを用いることの難しさは何か、など、あれこれ伺いました。

2 階のバルコニーにまで並んだ作品を大勢のかたが見にきてくださいました。
ワークショップも開催されました。誕生日の数字を使ってのアートでした。
大勢の方々が参加してくださいました。

見ているとあと 7-8 分でセッションが終わりそうになっているところにお母さんと小学生と保育園児の四人が興味深そうに見ていたので、「ワークショップやってますけど、やってみますか？」と声をかけると子どもたちが、「やりたい！」とのこと。スタッフに声をかけると、スタッフはまったく嫌な顔をせず、むしろ大喜びで手際良く親子のためにテーブルと画材を用意し、メインのワークショップの邪魔にならないように声を小さめにしながらどんどん描いてもらっていました。全体のワークショップよりちょっと遅めに終了。
わたしも作品を見せてもらいました。お母さんも、子どもたちも出来栄えに満足していたようでした。「楽しかった」「おもしろかった」「またやりたい」と、連発し、わたしとハイタッチして帰っていきました。
このスタッフの機転、やり終わったあとの達成感、子供たちとの見ず知らずのわたしとの喜びのハイタッチ。
ここに臨床美術の魅力を強く感じました。
いてくれてありがとうの哲学が脈々とながれていることを実感しました。

＊札幌市（2023 年 10 月 19 日～20 日：札幌市民交流プラザ SCARTS モール A/B)

札幌市への飛行機も 1 時間近く遅れて到着。
待っていてくださったご夫妻と、まずおいしいラーメンを食べ、おふたりの案内を受けて支笏湖へ。そして札幌市内へと向かいました。
札幌に着いてから美味しい夕食を数名の仲間たちと共に食し、楽しい親睦の時間となりました。翌朝早く小雨の中、私はカメラをもって札幌の大通り公園を歩きました。テレビ塔と木々の紅葉が本当に美しく心に残りました。
札幌の作品展の会場は当日 10 時からしか設営ができなかったとのことで、札幌の臨床美術士の皆さんは文字通りその時間きっかりに総出で作業に当たっていました。
旭川からも北見からも臨床美術士たちが応援に駆けつけてきていて、まるで、どこかの同窓会のような雰囲気でした。
北海道の移動は数時間が当たり前という感じですが、みんなで大切に活動して育ててきた臨床美術の歴史をそれぞれの臨床美術士たちが大切に守り抜いてきたのだなぁと感じました。
心が結びついていることがよくわかりました。
それぞれが実に手際よく、展示の配置を進めていました。

「これ見てください、すごいでしょう！」という作品展ではなく、「これは私たちがいろいろな人たちとは制作しました．楽しいですよ」「この活動には、達成感ありますよ、あなたもいかがですか！」というメッセージが明確に伝わってきました。
後ろ髪をひかれる思いで札幌を後にしました。

＊函館市（2023 年 10 月 27 日～29 日：函館市交流まちつくりセンター）

函館市での作品展には、私の体調不良で参加できませんでした。残念でなりません。
でも函館での作品展の写真を送っていただき、見せていただきました。
他の都市と同じように素晴らしい展示と臨床美術士たちの嬉しそうな表情が溢れていました。

「何が臨床美術士たちを繋いでいるのだろう。」とわたしは思い巡らしました。
そこにある美術活動の奥深さへの興味、一緒に喜べる臨床美術の共感性、
さらに、いてくれてありがとうの心。

そういう意識で参加者を歓迎し、他の人の作品を温かい心で楽しみ、その感動で広がりを期待しながらさらに活動への情熱を燃やす。これが 10 年間の原動力の土台のひとつになったのかもしれません。

「臨床美術ほっかいどう 10 周年記念作品展」
金子健二先生がご存命なら間違いなくそこに参加し、立ち会い、喜ばれたはずだと信じています。今回、ちょっとだけ参加させていただきました。これらの会場と作品、ワークショップの中に表現されている「臨床美術活動」の生き生きとしたいのちの躍動は、金子健二先生が心から願っていた臨床美術の姿のひとつだと感じました。

「臨床美術ほっかいどう」の関係者の皆さま、臨床美術士の皆さま、ご家族の皆さま、
活動継続 10 周年おめでとうございます。
そして、心から「いてくれてありがとう」
ますますの祝福と発展をお祈りしています。

2023 年 11 月 12 日
関根一夫